

生徒の道徳教材の読みに関する一考察

提案者 栃木市立吹上中学校 教諭

齊 藤 雄 輔

1 問題の所在と目的

令和元年度より中学校で「特別の教科 道徳」が全面実施となり、検定教科書の使用義務が生じたことから、教科書を読ませて授業をすることが増えたのは明らかである。その上で、教科化にともなう授業改善の一つの方策として、教材文の読み取りに関わる発問を極力行わないようにする傾向にあり、内容理解について、生徒の教材文の読解に頼る部分が大きくなったと考えられる。また、教材文の初発の感想を生徒に問いかけ、出てきた疑問点等から、問題解決的に展開される授業も多く見られることから、生徒が教材文を一度読んだきりで、内容をとらえられることが前提に進められているとも考えられる。

そこで、生徒に対し、教材文の読みについての調査を行うことにした。読解の状況はもちろん、どんな感想を持ったのかを調べてみることで、日頃の授業構成について振り返りをしようという提案をしたい。当たり前のように行われている授業構成における着眼点を批判的に見つめ直すことで、より生徒の実態に応じた授業改善につなげていくことができればと考えている。

2 調査の方法

第2学年生徒30名に、1学年の教材（いずれも初見）を読ませ、以下の①～④の質問に答えてもらう。

- ① 教材の内容をおおまかに教えてください
- ② 教材を読んで、疑問に思ったことや、考えてみたいことを教えてください
- ③ 教材を読んで、友達と話したり、友達の意見を聞いたりしたいことを教えてください
- ④ 教材から学んだことを教えてください

4つの質問は、生徒の反応等を予想しながら授業構成を行っていく際に、主に思い描いていること（私見）である。教材については、内容項目（A B C D）の4つの視点から、ランダムで1つずつ選出した。教科書会社は東京書籍。

6月 「自分の性格が大嫌い」	A 3 向上心、個性の伸長	※エッセー
7月 「楽寿号に乗って」	C 12 社会参画、公共精神	※生徒作文
10月 「銀色のシャープペンシル」	D 22 よりよく生きる喜び	※物語文
12月 「班での出来事」	B 8 友情、信頼	※編集委員による作文

調査を実施する際に、教科書にあらかじめ掲載されている「考える視点（巻頭）」や「発問（巻末）」を見たまま教材を読んだ群15人（ア群）と、それらを消した教材を読んだ群15人（イ群）に分けて、分析を進めることにする。ア群の生徒には、あえて「考える視点を」確認させてから、調査を行っている。（6、7、10月）

なお、12月の調査においては、②の質問をせずに、残りの3つについて質問した。理由は、以下（結果の分析と考察）において述べる。

3 調査の結果と考察

(1) ①～④の質問に関する事前の予想

- ① 生徒の読解力について、大いに危惧している。
- ② 生徒は様々な意見を出してくること。内容項目と関連した意見や、教師が想定している範囲内での意見ばかりではないこと。ア群の生徒は、視点や発問に影響される。
- ③ ②と同様。
- ④ 様々な意見が出ることはもちろん、難しい質問なので、答えにくいのではないか。

(2) 結果の分析と考察

全体を通して、ア群とイ群で、調査の回答内容に、大きな差は見られない。内容項目や、教材の種類における記述内容にも、大きな差は見られない。生徒は、あくまで自分の考えを述べていると考える。調査結果に示されているように、多少の引用は見られる。なお、学力（定期考査の点数）と回答の記述量に、相関は見られない。以下は、調査の質問ごとの分析。

- ① 回答だけ見れば、生徒はこちらが考えている以上に、内容をつかんでいる（上手に表現している）。
- ② 予想通り、様々な意見が述べられている。未記入者が多いのではないかと考えていたが、その予想には反した結果となった。教材の内容を批判的にとらえたり、自己を振り返ったりしながら意見を述べている生徒もいた。
- ③ 未記入者の割合が高い。②の質問との差を見出しにくかったのではないかと考える。そこで、12月の調査については②を削除した。しかし、未記入者の割合は多いままであった。

また、記述内容については、教材の内容についての疑問点よりも、自分自身や、自身の意見に対する友達の意見を求めている。12月の調査結果についても同様。

- ④ 予想に反して、未記入者の割合は少なく、両群ともに記述量が多い。エッセーの著者の意見や、ボランティア経験が豊富でない生徒にとっては、教材を読んだだけでも学ぶことがあったのではないだろうか。

教材を一度読んだだけで、これだけの考えが出てくるのだから、授業において、自分の意見を表現し、互いに意見を交わし合い、納得解を見つけてもらいたい。

4 今後の展望と授業改善に向けての意見

○ 展 望

- ・個人を追う分析 ・教員への調査 ・感動教材での調査 ※1965 宮田

○ 意 見

- ・「考える視点（巻頭）」や「発問（巻末）」の存在を、授業者側が過剰に気にする必要はない。
- ・教材文の読み取りに関わる発問の割合を減らし、批判的、分析的、投影的な発問に重点を置くことは、生徒の読みの実態に合っている。
- ・教材文の初発の感想を生徒に問いかけ、出てきた疑問点等から、問題解決的に展開することは、有効だと考えられる。ただし、導入においてテーマに迫るような提示をしたとしても、生徒の感じたことや疑問点は、多岐にわたることを想定したい。
- ・事前に教材を読ませ、生徒の感想をあらかじめ聞いた上で、授業構成を考える指導も有効だと考えられる。
- ・話し合い活動を行わせる場合には、動機付けについて十分に配慮する必要がある。投影的な発問について、意見を交流させることは有効であると考えられる。